

講演会 & ライブ な日々 ④⑤

古川 秀明

『般若心経とオープンダイログ 5』

そんなある日、困り果てていた両親の前に、強力な助っ人が現れました。
父方の祖母です。

私の状況を聞いた祖母は、
「心の病を治してくれるところを知っている。そこへ連れて行こう」
と提案しました。

私と両親は祖母に案内され、市電に乗って、出町柳にあった祈禱所へ向かいました。
そこは当時、拝み屋さんとして有名だったようで、祖母もそこで祈禱を受けていたよう
です。

祈禱所は古い民家で、入り口にはしめ縄のようなものが張られ、白い雷のような形の紙
垂(して)が揺れていました。

引き戸を開けて玄関に入ると上がり框があり、靴を脱いで上がると、大きな囲炉裏のよ
うな場所がありました。

薪が井形に組まれ、まるでキャンプファイヤーのように火が燃えています。
その前には丸いゴザのような座布団が四枚敷かれていました。

祖母、父、私、母の順に座ります。

しばらくすると、白装束の巫女さんのような女性が現れ、
「ご導師様が来られるまで、両手を合わせ、こうべを垂れて待たれい」と言い残して去って行きました。

さらにしばらくすると、ドン、ドンと太鼓の音が響き、先ほどの巫女さんが
「ご導師様の御入場」と大きな声で宣言しました。

やがて、腰の曲がった白装束のおばあさんが、大麻（おおぬさ）と呼ばれる榊に紙垂をつけたものを両手に持ち、私たちには目もくれず、キャンプファイヤーの前に正座しました。

老婆は大麻を振りながら呪文を唱え始め、そばに置かれた紙のような木片のようなものを次々と火の中へ投げ込みました。
投げ込むたびに炎は大きくなり、それに呼応するように老婆の声も動きも激しくなっていきます。

やがて老婆のテンションは最高潮に達し、
「キェ〜！」
という叫び声とともに、その場に倒れ込みました。

祖母はその姿をありがたそうに拝み続け、両親と私は、まるで何かのお芝居を見ているような気持ちで眺めていました。

すぐに巫女さんが老婆を抱き起こし、
「ご導師様の御神託がある。有難く聞くように」と告げました。

老婆は祈祷の結果を語り始めました。
「この子には狐の怨霊が憑いておる」
この言葉に一番驚いたのは、ほかでもない私でした。

身に覚えはまったくありませんし、そもそも狐という動物はテレビや動物園、絵本でしか見たことがありません。

いったいこれから何が始まるのだろう……。

いつ、どこで狐の怨霊なんてものが憑いたというのか……。

私たち四人は、それぞれ“狐につままれた”ような気分でした。

(次号に続きます)

シンガーソングライター

ふるかわひであき